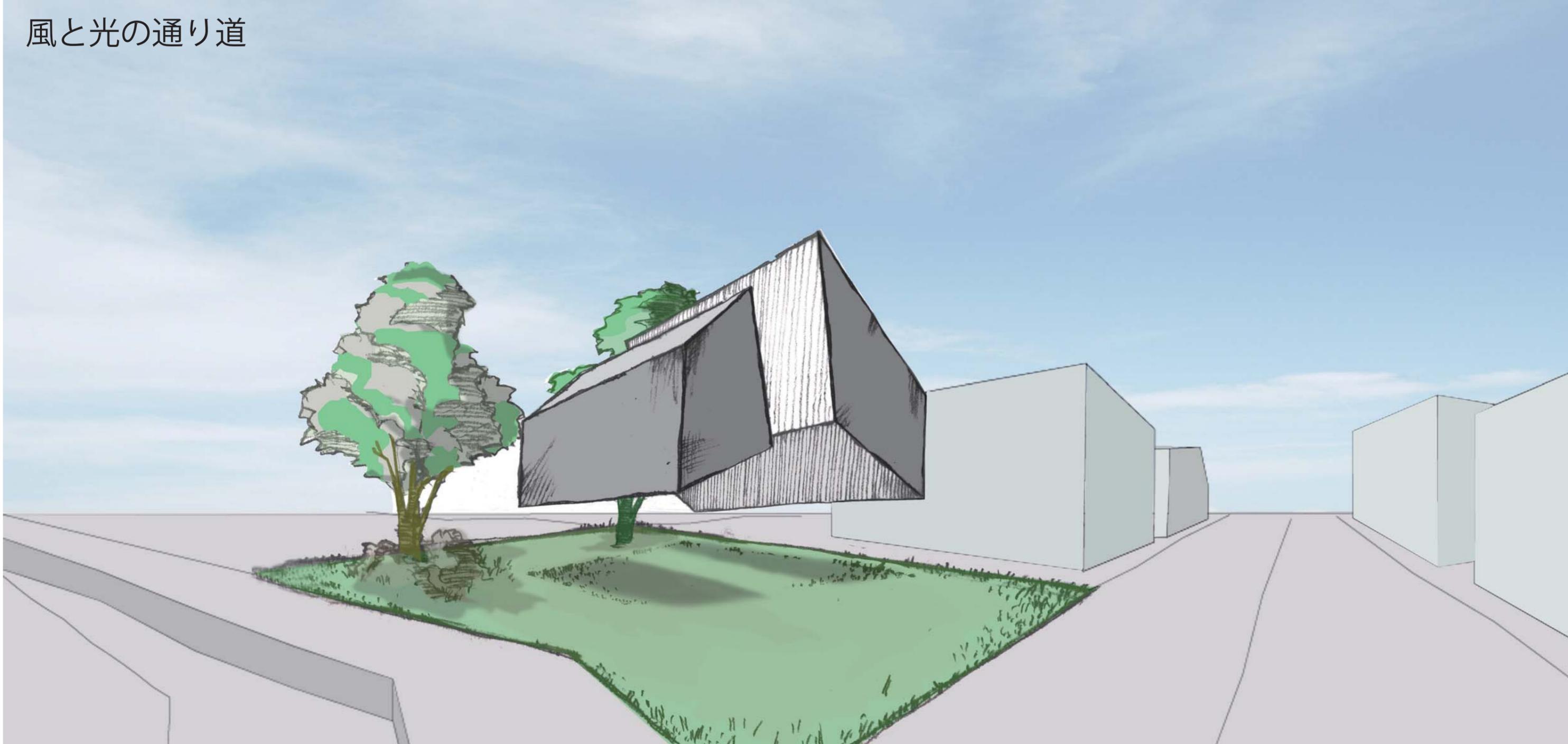


風と光の通り道



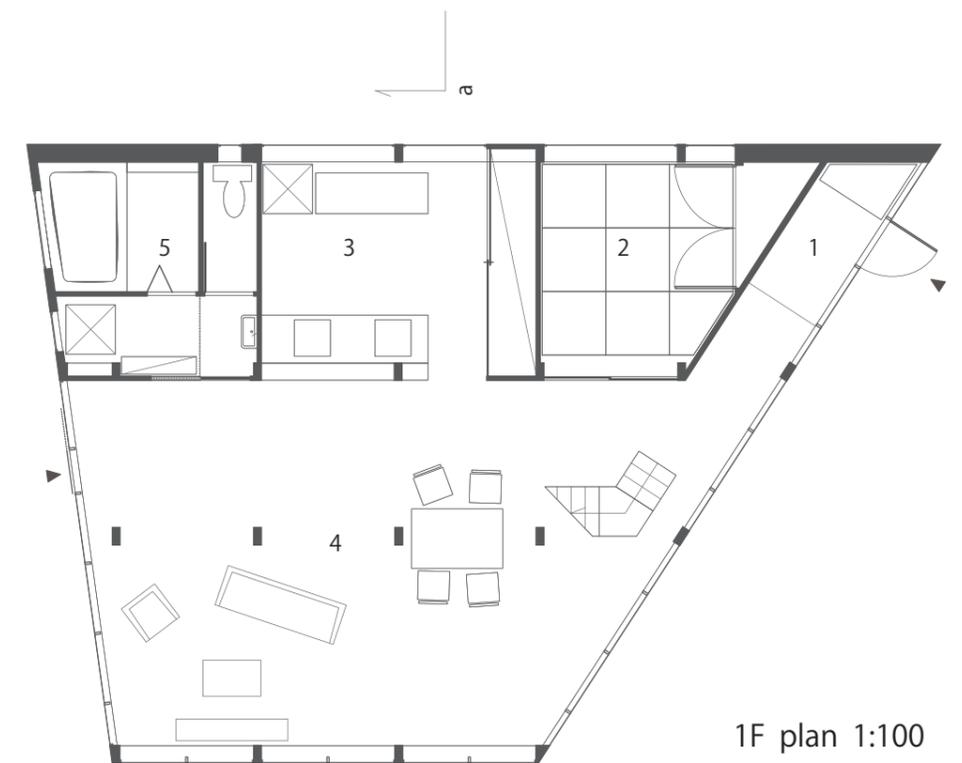
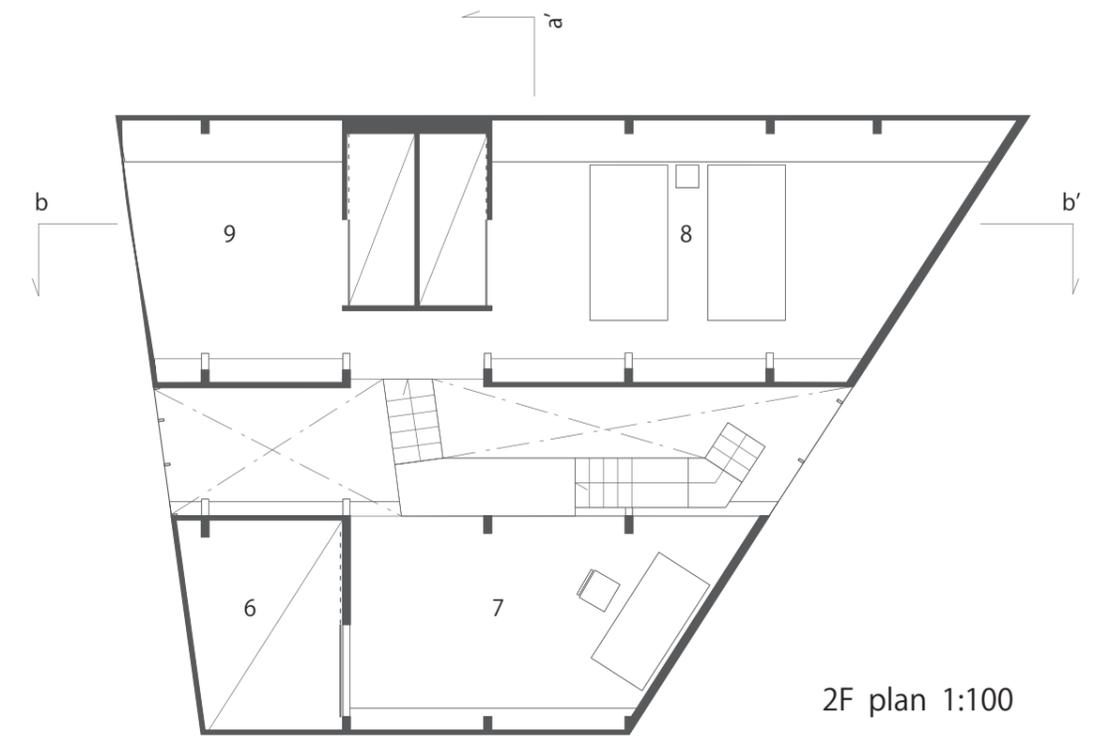
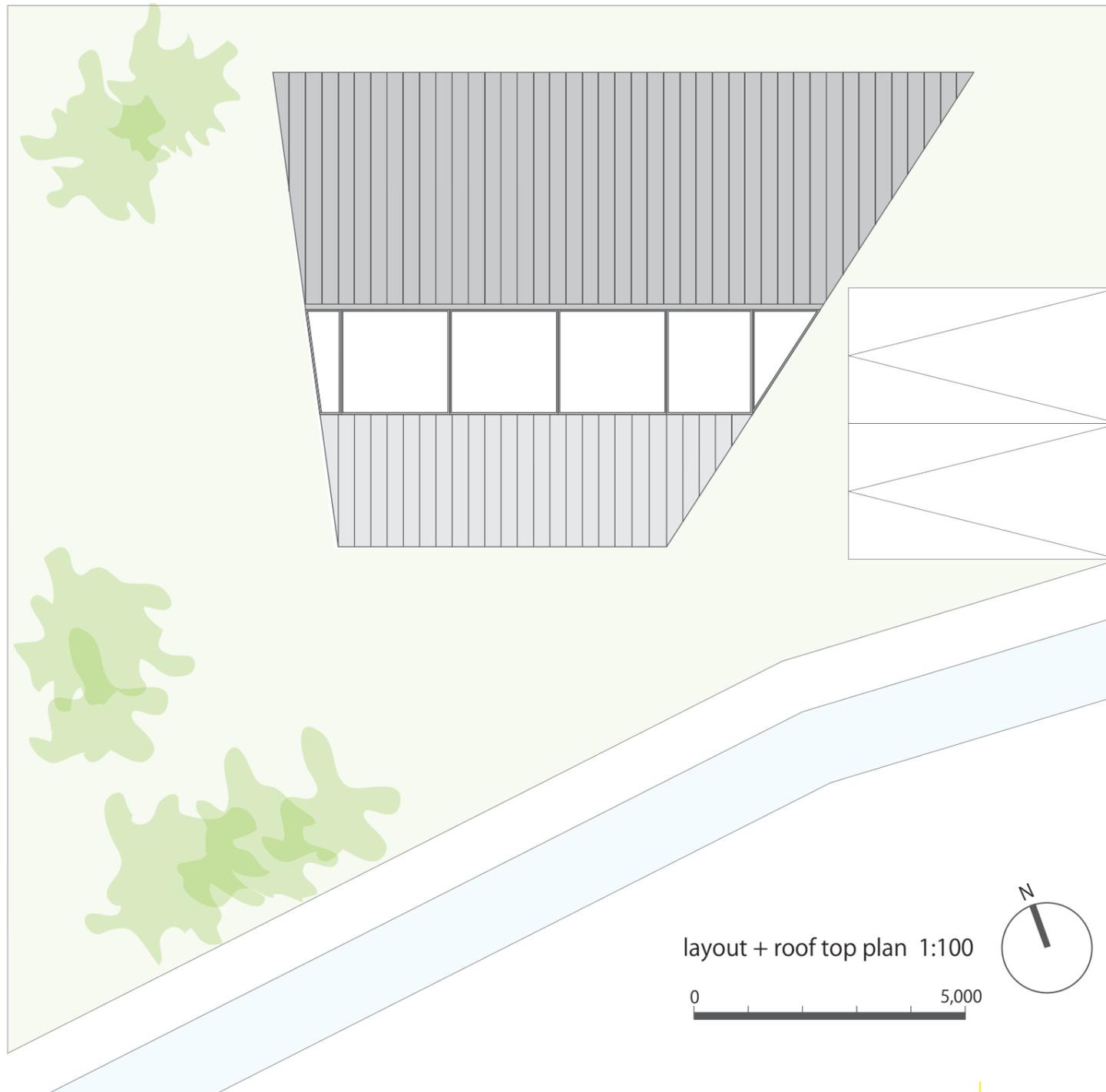
concept

「現在」から、50年後という「未来」にまで支持されるデザインを考える上で、私たちはまず、「過去」から「現在」にまで支持されてきたデザインに着目した。そのデザインには、「過去」から「現在」という長い時間軸の中で、支持されるべき要素を持っているはずであり、そこを起点とすることは、50年後という「未来」に向けた住宅を考える上で意義がある。しかし、これは、ただ繰り返せば良いという訳ではなく、「未来」に向けたデザインというクリエイティブな視点を求められたとき、これまで支持されてきたデザインを再定義する必要がある。

そこで、本設計では「過去」から「現在」にまで支持されてきたデザインとして、建築の『イエ型』という形態を用い、それを「未来」に向けた新たなものとして再定義するために、建築と日常生活に直接関係する『環境』に着目した。まず、これまでの建築と環境の関係を考えると、建築は室内空間を環境から守ることを求められてきた。これは、特に勾配屋根をもつイエ型建築に顕著にあらわれており、この関係がイエ型建築の本質であると考えられる。また、この本質が、イエ型建築が建築の原初的な姿といわれる所以でもある。つまり、これまでのイエ型建築は、「環境を遮るもの」であったといえるのではないだろうか。しかし、この関係を50年後という「未来」において考えると、最近環境問題が社会的に問題視されていることから、今後は環境がさらに変動していくことが予測される。この環境の変動は、決して良い意味ではなく、そのため、今後この変動に対応していくことが必要である。そこで、これからの建築と環境の関係を考えた上で、私たちは、環境を遮り、環境から室内空間を守るというイエ型建築の本質を再定義し、50年という時間軸の中で変動し続ける環境と建築の関係を見つめなおす。

以上をふまえ、本設計では、「環境を遮るもの」というイエ型建築の本質を保ちつつ、同時に、「環境を取り入れ合理的に活用するもの」としての住宅を提案したい。そして、本設計では『環境』の要素として、具体的に〈気流〉と〈光〉に着目する。その方法としては、まず、イエ型建築の外形を保ちつつ、1Fの内部空間の形状を変化させ、同時に、上下方向に貫かれた斜めのヴォイドを設ける。これらにより、スムーズな空気の流れを促し、四季を通じて良好な室内環境を維持することができる。また、この斜めヴォイドは、空気の流れを促すだけでなく、自然光も取り入れることができる。イエ型建築は、それ自体のボリュームが大きくなるにつれて、下階の中央部に自然光が入りづらくなり、明るさが不十分となる。それに対し、この斜めヴォイドは、直接的な自然光だけでなく、その空間を囲む斜めの壁により、自然光の反射光も取り入れることができ、過剰な自然光を避けながら、やわらかな光で下階の明るさを保つことができる。

このように、建築の内部空間を外部環境から守るために、最低限必要な部分では環境を遮りつつも、その環境自体を取り入れ合理的に活用することで、今後変動し続けるだろう環境に対応することができる。そして、建築と環境のこのような関係によりつくりあげられる、新たなイエ型の形態を持つ本住宅は、50年後の「未来」だけでなく、それ以降の「未来」にも支持されるデザインとなるだろう。

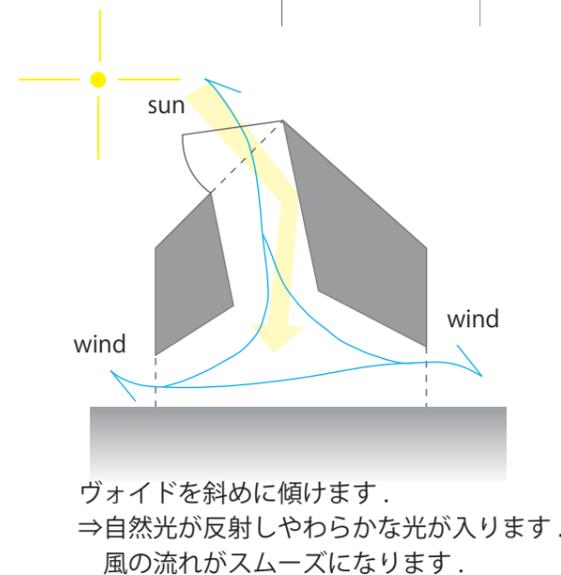
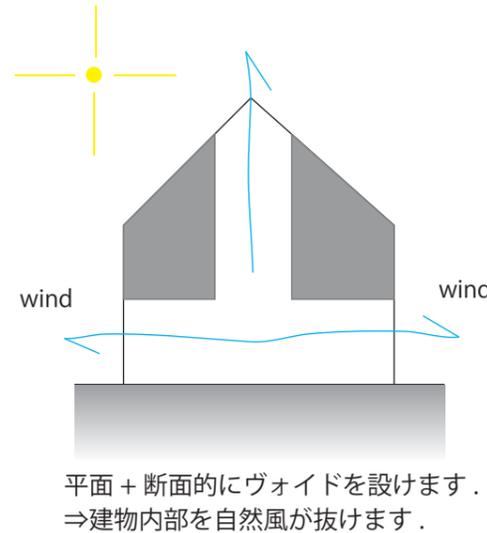
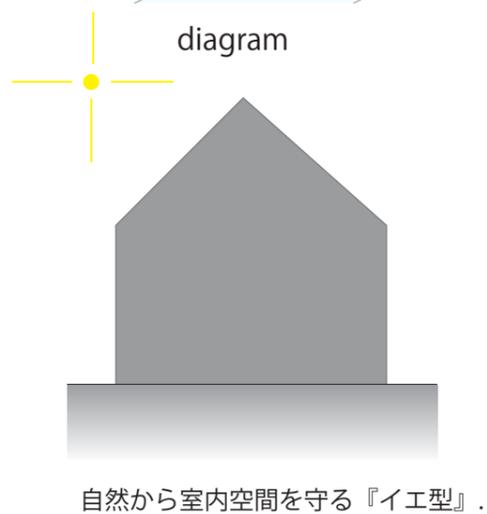


1. エントランス 2. 和室 3. キッチン 4. リビング/ダイニング 5. 浴室
 6. 物置 7. 書斎/フリースペース 8. 寝室 9. プレイルーム (将来的な子供部屋)

※将来的に【2. 和室】は、妻の両親との同居の際、両親の寝室として用います。

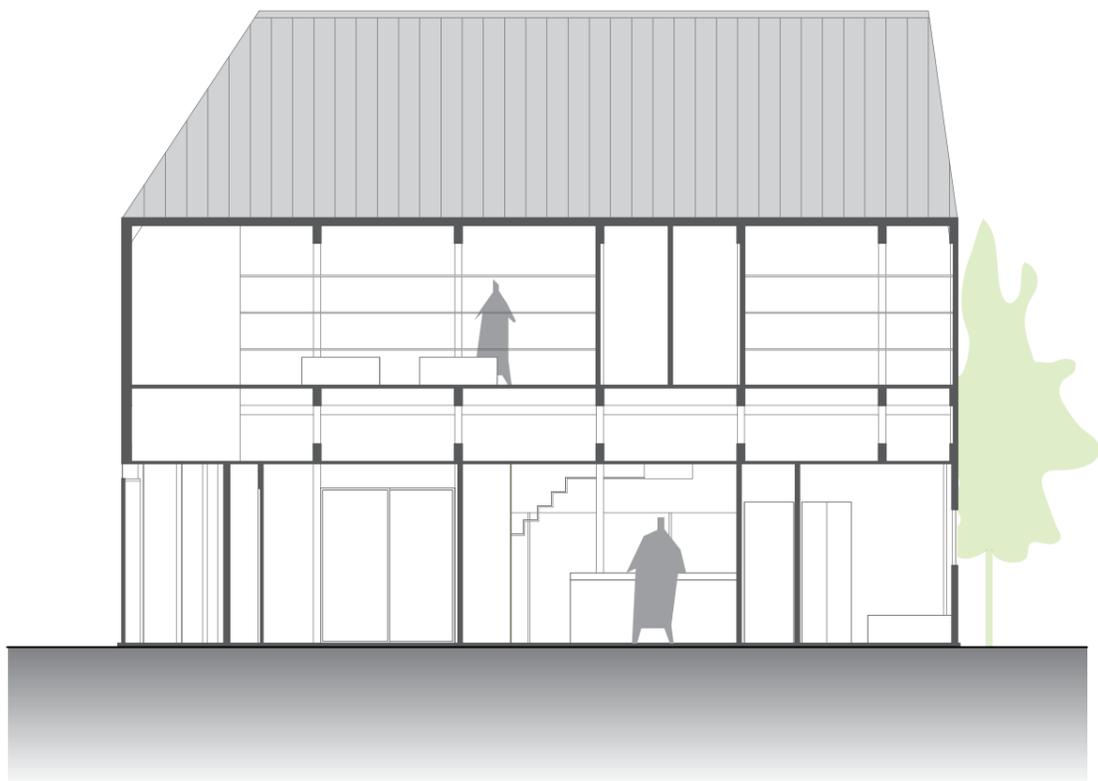
一建物概要一

- ・延べ床面積：150.0 m²
- ・容積率：51% (<200%)
- ・建蔽率：30% (<60%)

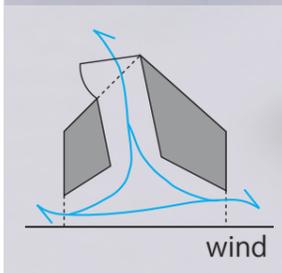
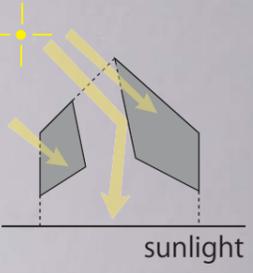
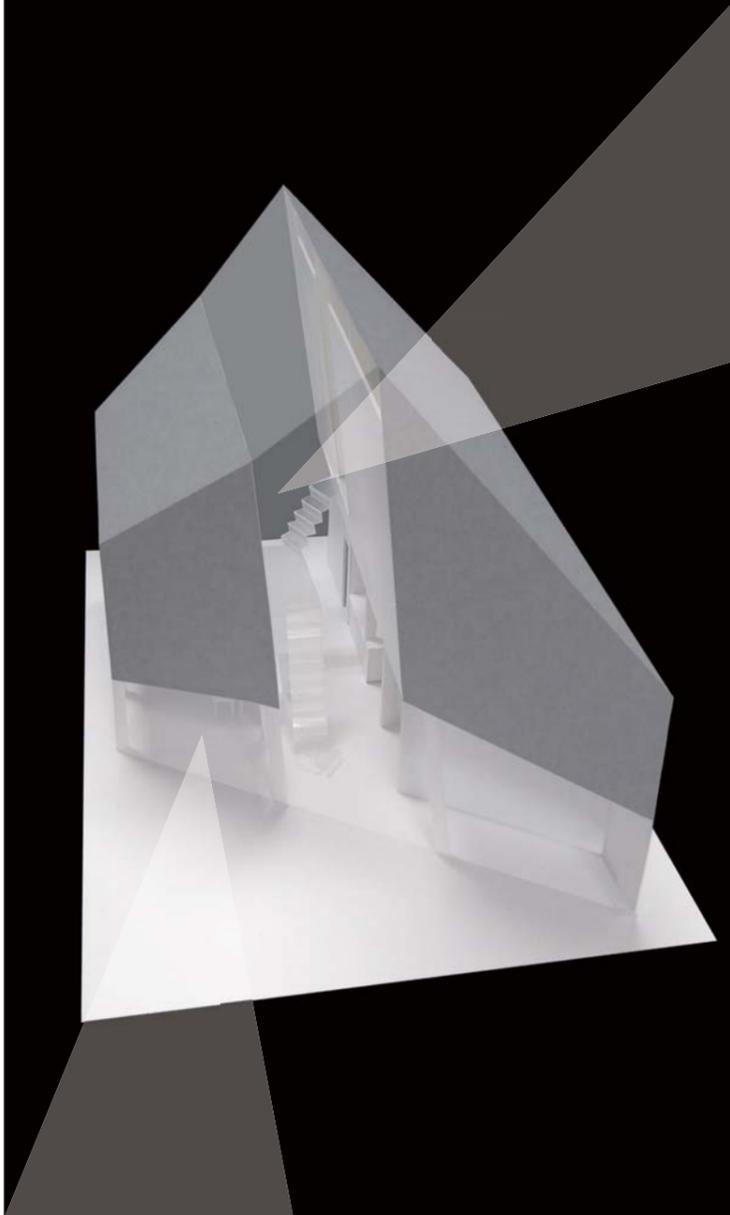




section a-a' 1:100



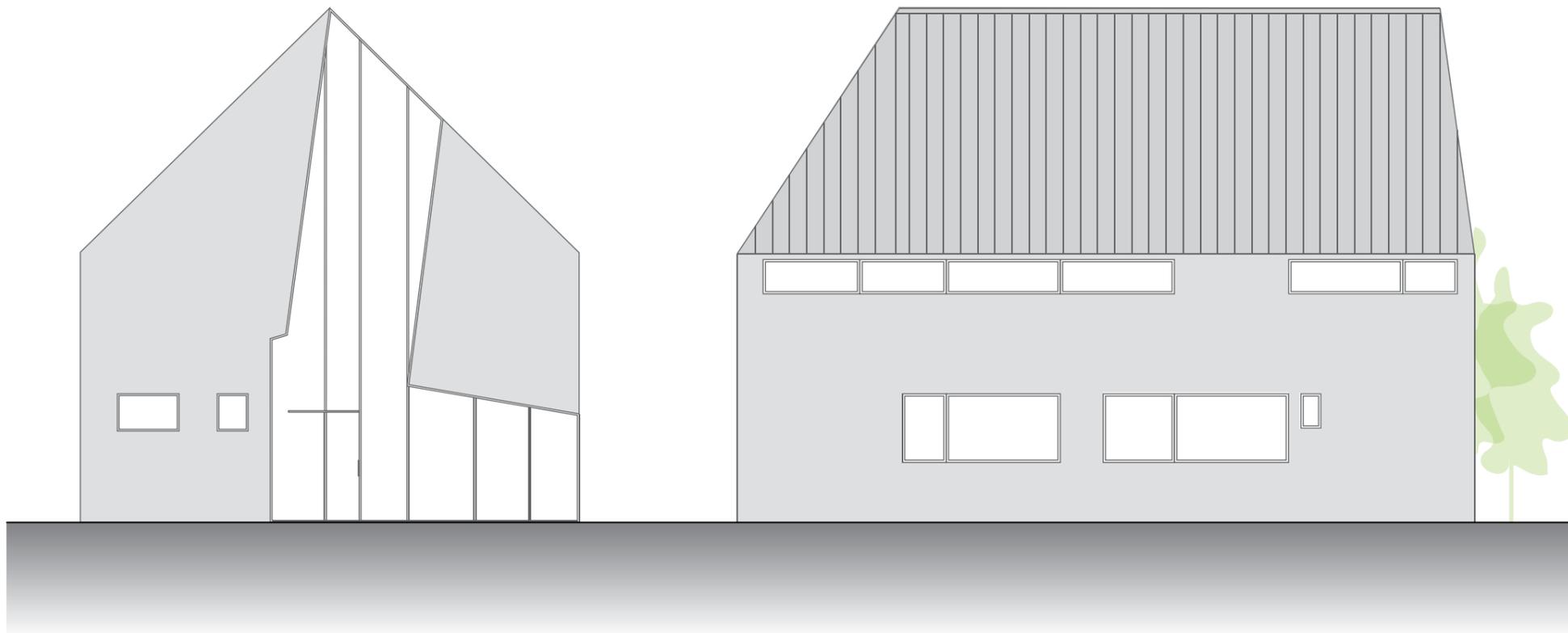
section b-b' 1:100





east elevation 1:100

south elevation 1:100



west elevation 1:100

north elevation 1:100



上：反射により1Fに落ちてくるやさしい自然光
下：2F書斎に差し込む自然光